

「3学期始業式訓話」

2015年が始まった。今年は阪神大震災から20年となる年。北須磨高校の当時を振り返ってみると、クラス数が全34学級で今のほぼ倍の生徒が学んでいた。地震で学校自体は渡り廊下や教室の仕切り壁、高架水槽・体育館の天井等に被害を受けたものの大きな損傷はなかった。

全焼全壊を含む自宅に被害を受けた人が82人、避難所などへ避難した人が91人、幸いにも生徒は全員無事だったが、母親を始め親族を無くした人が12名もおられた。

2週間後の1月31日から短縮で授業が再開され、完全平常授業に戻ったのが1ヶ月以上後の2月20日だった。

3年生は、センター試験は終了していたものの受験勉強どころでない人も多く、大変苦労されたがその中でも国公立大学に100人以上が進学した。また2年生は、修学旅行に新幹線で長野県戸隠高原に出発したのが地震前日の1月16日。翌朝の震災で列車が不通のため帰るに帰れなくなり、とにかく予定通り日程をこなし、大阪から急遽迎えに行った大阪名鉄観光のバスに乗って北部の日本海側から南下し、20日19時間かかって神戸に帰ってきた。

当時の学年通信からの抜粋。

「神戸に地震がくるとは、本当に夢にも思っていなかった。だから修学旅行の二日目の朝、先生が「神戸が震度6やぞ」と言いこられた時は、何が何だかわからなかった。テレビをつけると長田の火事の映像が写った。その時出た言葉は「ちょっと待ってえなあー」だった。それから3日間、スキー以外の時間はほとんどテレビをつけて神戸の様子を見ていた。自分の家の近くや、知っているところが燃えたり壊れたりしているのを見て、茫然となった。家に電話が通じたものやはり気になってしまう。リフトに乗っているときもすぐ頭に浮かんでしまった。部屋の子同士で、もしもの時のため、電話番号を教えあったりした。〔中略〕20日、やっと名谷に帰ってきてみると、テレビで見た悲惨な状態とは違い、一見普通だった。だが学校で解散したあと、板宿に着いてみると、いつも前を通っているマンションは1階部分が折れ曲がっており、八百屋さんは瓦礫の山となってぺちゃんこになっていた。自分の家はましな方だが、瓦は落ち、ひびは入りあぜんとなった。電機も水もガスもつかないし、水汲みは飛松中学校にもらいに行ったりした。全く違う光景に「何で神戸が…」と何度も思った。

まだ余震は続いていて、その余震で家が壊れたらどうしようと、とても不安だが、早く神戸が元に戻ってほしい。そしていつか私が中学の音楽の教師になった時、この自信のことを生徒に話せたらと思う」

阪神大震災以来、私たちはいろいろな災害を経験してきた。誰もが「なんでここが…」と思ったに違いない。しかしこの日本という地に生活し学ぶ以上、今後も災害は必ずやって来る。先日も桜島噴火の予報があった。鹿児島湾全体が始良カルデラという大きな火山だから、いつ巨大噴火をしても不思議ではない。南海トラフの地震もあと3・40年の間に来るとも言われる。災害そのものをなくすことはできないが、被害を少なくすることはできる。これからの未来を生きる皆が、災害に負けない新しいシステムを作るのだ。壊れにくい建物、災害の予測や情報伝達、医療技術や心のケア等々解決すべき問題はいろいろある。ぜひ「何で…」と悔やまなくて良い社会を作って欲しい。

今月17日の震災の日、放送部が3時頃からボランティアとして「FMわいわい」の追悼番組に参加する。それと同時に身近な大人に、あの時どうしていたのか、どう感じたのか、あれからどう生きてきたのかを聞いて、今後を生きる参考にしてもらいたい。

最後に今年は未年、羊は中国では古来縁起の良い動物と言われており、羊の着く漢字には「祥」「翔」「善」「美」などがあり、「羊致清和（羊は天下太平をもたらす）」と、未年は平和な年になると言われている。皆にとり幸多き年となることを祈って、3学期始業式のことばとする。